竹の琴

森野　水琴

彼は十二月に奈良マラソンを走った。
かつての都、平城京の南を走り緊張した。夏に要人が凶弾に倒れた現場に思いを寄せた。
奈良市から天理市へ走る途中で楽器を叩く音が聞こえた。竹が奏でられているようである。木琴ならぬ竹の琴である。心地よい響きが背中を押す。勇ましい太鼓とは別な温かみが感じられる。
折り返して再び竹の琴を聞いた。道を挟んで竹林に反響する。竹の琴に包まれているようで心地いい。
ふと考えた。彼は何になりたいのだろうか。
心地よく響く音になりたいのだろうか。
良い音を奏でる竹になりたいのだろうか。
良い音を奏でる者になりたいのか。

いや　良い言の葉を紡ぐ者になりたい

一年後の十二月、彼は奈良マラソンに帰ってきた。
竹林が近づき、竹の琴が心に沁みる。
奏者たちは彼よりも年上に見受けられた。
今回も往きと帰りの二回演奏を聞いた。
帰りには感謝の挨拶をして彼はゴールを目指した。

また来年も聞きに来よう

また一年たち、彼は奈良マラソンを走った。
スピードは確実に落ちてきて、春にハーフマラソンに二回挑戦するも、二回とも途中で制限時間オーバーしてしまった。
奈良マラソンが近づいてもスピードは戻るどころか、遅くなるばかり、完走出来ないかもしれないという不安で一杯になった。
レース当日は絶好のマラソン日和に恵まれた。走り出した彼は軽やかな脚に驚いた。十月に他界した友が背中を押してくれているかのようだった。
十八キロ地点の手前に竹林がある。待ち焦がれた竹の琴が聞こえる。彼が手を振ると、奏者の一人が応えてくれた。
二十五キロで折り返し、三十二キロ地点過ぎで竹林に再会。
「ありがとう、また来年」と彼は挨拶して走り続けた。
三十九・六キロ地点が最終関門。無事クリアして、あとはウィニングランである。
「西さん、やったよ」と内心つぶやきながら彼はゴールを目指す。
練習以上の出来で、彼は無事完走した。

「すいきん」と書かれたゼッケンで彼は走った
「にし　すいきん」で来年は走ろう